

国名勝「江馬氏館跡庭園」を目指して

今年一月、飛騨市は「江馬氏館跡庭園」が名勝に指定されるよう、国に対して意見具申しました。「江馬氏館跡庭園」は、江馬氏の下館（平地に築かれた居館）にある庭園で、発掘調査の成果をもとに約五百年前の様子を忠実に復元したものです。

現在、江馬氏の下館跡は周辺の山々にある6つの山城（山の上に築かれた城）の跡とともに、昭和五十五年（1980年）に国の史跡に指定されています。今回の名勝指定の決定がなされれば、江馬氏の館跡が日本の歴史・文化を考える上で重要な遺跡であると同時に、中世の地方武士が造った庭園を代表するものの一つとして芸術鑑賞上の価値も高いものであると証明されることになります。

今後、国の審議を経て正式に指定されると、国名勝「江馬氏館跡庭園」が誕生します。

名勝とは

名勝とは、「庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとって芸術上又は観賞上価値の高いもの」のことです（文化財保護法第一〇九条）。

つまり、その景観を観て素晴らしい・美しいと評価されるような庭園ということなんです。室町時代の庭園はそのほとんどが現在まで残っていません。江馬氏の庭園は、当時の武士が精魂込めて造った庭の様子を眺めることができる、全国でも有数の場所なのです。

もともと国の史跡（歴史上の価値が高い遺跡）にも指定されている所ですので、もし名勝に指定されれば、江馬氏の庭園とそれを眺める会所は、「史跡」と「名勝」の2つの価値がある、ということになります。

POINT !

- ◆京都・室町将軍の影響を受けた、当時最先端の「見せる」庭づくり
- ◆会所建物からの視点を意識した、「おもてなしの心」
- ◆地元産の船津花崗岩の景石が立ち並び、土塀越しに雄大な山々を借景とするなど、飛騨の自然・立地を最大限に活用

土塀越しに飛騨の雄大な山並みが見えます

小萱

観音山（傘松城跡）

南側の護岸は1mをこえる
巨石が並びます

庭園の中央の中島

中島の隣に立石

北側の護岸は会所の縁側と平行に
青色の川原石を並べています

会所の縁側
（ここから眺めます）

江馬氏について

江馬氏は、室町時代に高原郷（現在の神岡町、高山市上宝町付近）を治めていた武士です。古文書等では、十四世紀ごろからその活動を見ることが出来ます。室町幕府の文書に度々登場し、飛騨における有力武将であったことが分かります。文明十八年（一四八四）には「江馬三郎左衛門元経」が小八賀郷（現在の高山市丹生川町付近）の代官に任命され、延徳三・四年（一四九一・一四九二）の記録からは、江馬氏が室町幕府から荒城郷にあった北野社の所領回復や所領経営を任されたことが分かります。高原川流域だけでなく、古川盆地まで勢力を拡大していたことが分かります。

また延徳元年（一四八九）には、万里集九という禅宗の僧が高原郷に立ち寄った際、江馬氏の手厚い饗応を受けたと本人の日記に記録されています。江馬氏は、文化的にも飛騨の有力者であったと推測されます。

江馬氏の滅亡

戦国時代に入ると、江馬氏は飛騨南部や高山盆地を手中に収め、国司・姉小路氏の名跡を継いだ三木氏と競います。また、飛騨自体が甲斐の武田氏、越後の上杉氏という2大勢力の間で揺れ動きます。

その武田氏を滅ぼし、天下統一が目前だった織田信長が天正十年（一五八二）の「本能寺の変」で没すると当時の江馬氏の当主・江馬輝盛は三木自綱に対し、飛騨の支配権をめぐり決戦を挑みます。両軍は荒城郷八日町（現在の高山市国府町）で激突しますが（「八日町合戦」）、輝盛は敗れて討死し、直後に高原郷に攻め入った三木方の軍勢によって高原諏訪城も落城します。こうして北飛騨の雄として名をはせた江馬氏は、領主としての姿を失いました。



八日町の合戦で指揮をとる江馬輝盛（斐太後風土記）より

本城（有事の際の詰め城）
「高原諏訪城跡」



庭園の中心となる立石



池には水が溜まらない構造になっています

